＜一般研究＞

2歳児をもつ母親の育児不安

― 2歳児育児講座を通して ―

研究第8部　星　美智子
共同研究者　清水　玲子（埼玉県立衛生短期大学）
植村　規代（2歳児研究グループ）
小林　千鶴子（　〃　）

Ⅰ　目　的

これまで，育児講座を通して2歳児の行動観察を行い，その行動特徴を考察してきた。（当研究所紀要16集及び17集参照）一方，育児講座では，子どもの保育と併行して母親たちに講座（講師による講義，育児相談，テーマごとの母親どうしの話し合いなど）を行ってきている。本研究では，2歳児をもつ母親が，育児をする上で，どのような問題を抱えているかを，すでに報告した2歳児の行動特徴との関連で明らかにするとともに，講座への参加を通して母親がどのように変化していったかを分析することにより，こうした講座のもつ意義を検討し，今後の実践に役立てることを目的とする。

Ⅱ　方　法

〔育児講座の概要〕

・2歳児とその母親を対象に，週1回，1日1時間半ずつ9回連続して講座を行い，1期とする。期ごとの人数は，母子約15組である。保育は当研究所の一室（ホールのような広さの部屋）で行い，その半分をアコーディオンカーテンで区切って母親の講座を行う。（アコーディオンカーテンは⅓ほど開けたままにしておく。）子どもたちは，保育者3名によって保育されているが，受講中の母親のところへ行くのは自由である。母親の座席は，第1回に決めて固定し，勝手に動いて，子どもが母親を見失なうことのないようにする。

・母親の講座の内容は次のとおりである。①講師による講座は，2歳児の特徴を理解し，適切な育児の方法を学べるように，「2歳児の発達」「育児上気がかりなこと」「2歳児の病気」「食事とおやつ」「絵本の与え方」「家族関係」などのテーマで専門家の講義を受け，質疑応答を行う。また「手作りおもちゃ」のテーマで，講師の指導により，手作りおもちゃの実習を行う。②テーマごとに，母親をグループに分け，司会を決めて母親どうしで話し合う。③個人的に育児相談を行う。④おやつの場面など，母親に子どもの保育を見学させる時間を設ける。

〔対　象〕

対象は，育児講座に参加した2歳児の母親187名である。子どもの月齢は，2歳前半133名，後半54名，男女の内訳は，男子90名，女子97名（表1－2）である。

表1－1　月齢別

前　半	後　半	計
133（71.1）	54（28.9）	187（100.0）

表1－2　男女別

男	女	計
90（48.1）	97（51.9）	187（100.0）

核家族は80.2％（表1－3）子どもの兄弟関係は表1－4の通りである。（1期～13期まで）

表1－3　家族形態別

核家族	複合家族	計
150（80.2）	37（19.8）	187（100.0）

表1－4　きょうだい関係

1人っ子	第1子（下あり）	第2子	第3子	計
132（70.6）	34（18.2）	18（9.6）	3（1.6）	187（100.0）

〔手続き〕

1.　講座の開始日と終了日に，質問紙法により，母親に記入させる。

・開始日……子どもの発達，くせ，態度などで心配な

こと，育児上の不安などの質問項目

・終了日……講座に参加しての感想（講義，母親の気持子どもの変化，講座全体への意見など）の自由記述をさせる。

2. 講座申し込みのさい，家庭調査表に「家族構成」「子どもの病歴」「子どもの性格」「どんな子どもに育ってほしいか」などを記入させ，家族関係や母親の子ども像，子どもの心身の特徴を把握する。

3. 子どもの保育場面を観察する観察者2名，保育者3名，講座責任者全員で，毎回子どもひとりひとりの状態や母親のかかわり方について討議し，次回への実践上の方針を検討する。

〔期　間〕

1979年6月～1983年4月　（講座第1～13期）

Ⅲ　結　果

資料を次のような視点でまとめ，分析した。

1. 母親が問題視する2歳児の行動の分析

1）全体的傾向

2歳児をもつ母親が，自分の子どものどのような行動を問題と感じ，育児上どんな不安を持っているか，について質問紙を整理した。

(1) 子どもの発達について

子どもの発達についての不安は，表2が示すように，言葉の遅れが最も多く，20.9％あるほかに，精神の発達，身体の発達，運動の発達などが挙げられているが，それぞれ約10％にとどまっている。

表2　子供の発達についての不安　（ ）％

	特に問題なし	心　配	計
身体の発達	167 (89.3)	20 (10.7)	187 (100.0)
運動の発達	167 (89.3)	20 (10.7)	187 (100.0)
ことばの発達	148 (79.1)	39 (20.9)	187 (100.0)
精神の発達	166 (88.8)	21 (11.2)	187 (100.0)

(2) 子どもの生活習慣について

生活習慣形成上の悩みは，表3の通りであるが，食事に関することが53.5％と過半数になり，かなり多くの母親が食事については困っていることがわかる。食事に問題をもつものの内訳をみると，「むら食い」が食事の悩みの56％を占め，「少食」35％，「偏食」26％と続いている。また排泄の習慣については，44.4％の母親が悩んでおり，そのなかでは自立していないことに対する不安が57.8％，おねしょへの不安が14.5％となっている。睡眠については，21.4％の母親が不安をもっている。

表3－1　子どもの生活習慣について

	特に問題なし	心配あり	計
食　事	87 (46.5)	100 (53.5	187 (100.0)
睡　眠	147 (78.6)	40 (21.4)	187 (100.0)
排　泄	104 (55.6)	83 (44.4)	187 (100.0)

表3－2　食　事

少　食	偏　食	ムラがある	その他	計
35 (26.5)	26 (19.7)	56 (42.4)	15 (11.4)	132 (100.0)

表3－3　睡　眠

夜泣き	睡　眠	その他	計
7 (14.9)	12 (25.5)	28 (59.6)	47 (100.0)

表3－4　排　泄

未自立	おねしょ	その他	計
48 (57.8)	12 (14.5)	23 (27.7)	83 (100.0)

(3) 子どもの遊びについて

子どもの遊びについての問題では，問題をもつものを100として「お友だちがいない」が57.2％と過半数を占め，「遊び場がない」は15.5％であり，友だちがいないことへの不安が大きいことがわかる（表4）。

表4－1　遊びについて

特に問題ない	心配あり	計
56 (29.9)	131 (70.1)	187 (100.0)

表4－2　遊びについての問題

お友達がいない	遊び場がない	そ　の　他
107 (81.7)	29 (22.1)	32 (24.4)

N＝131

(4) 子どものくせについて

表5で示す通り，半数に近い46.5％の母親が特にないと答えているが，残り100名（53.5％）は心配があると答えている。この100名の気になるくせの中では「指しゃぶり」が24.6％，「いつでも手離せないものがある」が13.9％あり，他の7項目は数が少なく，問題が広範囲に分散していることを示している。

(5) 子どもの態度で気になることについて

表5－1　気になるくせ

特に問題ない	心配あり	計
87(46.5)	100 (53.5)	187(100.0)

表5－2　気になるくせの種類

指しゃぶり	いつも手離せないものがある	爪かみ	物なめ物しゃぶり	乳房を吸う
46 (46.0)	26 (26.0)	2 (2.0)	5 (5.0)	5 (5.0)
歯ぎしり	**ヘソ，髪，鼻，性器いじり**	**マスターベーション**	**チック**	**その他**
5 (5.0)	15 (15.0)	0 (0.0)	1 (1.0)	27 (27.0)

N＝100

表6－1　子どもの態度

気にならない	気になる	計
21 (11.2)	166 (88.8)	187 (100.0)

表6－2　子どもの態度で気になること　( )%

母親への依存がつよい	母親から離れない	47	170 (40.4)
	引っ込み思案	40	
	泣きむし	30	
	甘えすぎ	27	
	人見知りが強い	26	
母親とのトラブル	わがまま	55	142 (33.7)
	かんしゃくもち	42	
	言うことをきかない	34	
	やきもち	11	
他の子とのトラブル	らんぼう・噛みつく・たたく	21	42 (10.0)
	人のものをとる・うまく遊べない	21	
集中力	落ちつきがなさすぎる	22	22 (5.2)
情緒	恐怖心が強い	14	14 (3.3)
その他		31	31 (7.4)

N＝421

表7－1　子どもの育て方の不安

特にない	ある	無答	計
99 (52.9)	63 (33.7)	25 (13.4)	187 (100.0)

表7－2　育児態度

きびしい	普通	甘い	無答	計
15 (8.0)	143 (76.5)	24 (12.8)	5 (2.7)	187 (100.0)

表7－3　母親の気分が育児態度に影響する

しばしば	ときおり	ほとんどない	無答	計
29 (15.5)	132 (70.6)	21 (11.2)	5 (2.7)	187 (100.0)

表7－4　家庭内のしつけの統一

問題なし	統一とれない	無答	計
118 (63.1)	59 (31.6)	10 (5.3)	187 (100.0)

子どもの態度については，特に気になることはないと答えた母親は11.2％にすぎず，約9割の母親は，気になることがある結果がでた（表6－1）。内容は多岐にわたっているが，類似していると思われる行動をまとめると，表6－2のようになる。「子どもの態度で気になること」のマルチ回答数421を100としての割合をみたものである。「母親から離れず，甘えん坊」であることについての不安が40.5％，「わがままで言うことを聞かない」ことについて33.7％，他の子に対して乱暴したり，他の子どものものを取ったりすることについての不安が10.0％である。

(6)　子どもの育て方の不安について

育て方の不安は，表7に示すように，「なし」が52.9％と半数を越えているが，33.7％が「ある」と答えていることにも注目すべきであろう。育児態度のきびしさについては76.5％が「普通」と答えており，態度の一貫性については母親の気分が影響する頻度は「ときおり」が最も多く70.6％となっている。家庭内での育児態度の統一については，「とれない」と答えた母親が31.6％あり，子どもの父親や祖父母との態度のくいちがいがみられた。

(7)　月齢別の検討

表1の( )に示すように，2歳前半（2：0～2：5）と2歳後半（2：6～2：11）に対象児をわけて，それぞれの母親の育児上の不安に差があるかどうかを各質問項目別ごとに比較検討した。ここで顕著な差がみられた項目は「排泄について」であり，他の項目では相互に大差はみられなかった。排泄について心配している母親は，表8の( )にみるように前半が46.6％，後半が38.9％で，後半の方が心配は少なくなっている。しかし，それほど大きな開きはない。前半と後半で明らかな違いがみられるのは，心配の内容である。子どもの年齢が2歳前半の場合は「排泄の自立のおくれ」の心配が70％弱，後半は24％弱と減少し，2歳後半になると「おねしょ」の心配が逆に多く38.1％で，前半の6.4％の6倍近い割合を示している。つまり，排泄の自立は大体2歳前半までに完

表8　排泄についての不安

	特に問題ない	心配あり	計
前　半	71 (53.4)	62 (46.6)	133 (100.0)
後　半	33 (61.1)	21 (38.9)	54 (100.0)
合　計	104 (55.6)	83 (44.4)	187 (100.0)

排泄の問題

	心配あり			
	未自立	おねしょ	その他	計
前　半	43 (69.4)	4 (6.4)	15 (24.2)	62 (100.0)
後　半	5 (23.8)	8 (38.1)	8 (38.1)	21 (100.0)
合　計	48 (57.8)	12 (14.5)	23 (27.7)	83 (100.0)

表9　母親自身の変化

複数回答

1. 全体的な感想 勉強になった，役立った，参考になった 有意義だ　た，充実していた 子どもがたとしみにしているのが親としてよかった ――など	92 (49.7)
2. グループ内の交流で感じたこと 母親同志の話し合いができてよかった 同じような悩みをもっていて安心した 集団の中で子どもを客観的に見られた ――など	90 (48.6)
3. 子どもとの接し方の変化について感じたこと ゆったりと子どもに接するようになった 叱り方など接し方について反省した 育児に対して見方がひろくなった ――など	78 (42.2)
4. 母親自身の変化について感じたこと 家事・育児から解放された時間をもてた いろいろな人と友だちになれてよかった 自分自身が成長した ――など	15 (8.1)
計	185 (100.0)

了し，排泄が自立すると次におねしょを問題視するようになるといえる。

2）わが子に対して不安の多い母親の特徴

質問紙調査で，問題視している項目の数の分布を調べ（M＝5.65，SD＝2.6952）問題数の多い（11項目以上を印した者　11人を取り出し，申し込み時の家庭調査票もあわせて分析した。その結果，1人を除いて全員が，わが子の性格を，「わがまま」「泣き虫」など，否定的なことばでのみ述べており，他方，母親たちの希望としては「のびのびした子どもになってほしい」と記している。

2.　受講後の母親の報告の分析

終了時に，母親が質問紙に記述した感想を，次のように分類し，分析した。

1）全体的な傾向について

全体的な感想が肯定的であるか，否定的であるかについては，否定的であったのは187名中2名のみであり，圧倒的に多くの母親が肯定的な感想を述べていることがわかる。

2）母親自身の変化

母親自身の変化は，表9でまとめたように，講座全体について「よかった」と感じている母親が49.7％，また講座に参加した他の母親と話し合ったり，他の母子のかかわりをみたり，自分の子どもが他の子どもや保育者と遊んでいるところを観察したりすることによって安心したという感想を記した母親が48.6％であった，さらに，それらを通じて，日頃の自分の子どもに対する態度を反省し，子どもへの接し方が変化してきたと述べている母親が42.4％もみられた。また「家事・育児から解放され，外の世界がひらけた」「友だちになれた」「夫妻の会話がふえた」など，記述としては15名（8.1％）であるが，2歳児をもつ母親が子どもに追われずに外へ出て，自分自身の充実した時間をもつことの満足感がうかがえる回答をえた。

3）母親からみた子どもの変化

母親からみて，子どもがどんなふうに変化したか，については，表10に示す通りであるが「きまりなどを守るようになった」「活発になった」「言葉が豊富になった」「言葉で言って伝わるようになった」など，集団を初めて体験したことによる成長と変化を感じている母親が43.2％で最も多かった。「友だちと遊ぶ楽しさを覚えた」「他の場所でも自分から進んで遊ぶようになった」など，友だちとの関係の変化を認めている母親が34.1％と次に多く，また「行くのを楽しみにしている」「講座の保育の場面を家でまねする」「講座のある曜日を覚えた」など，子ども自身の中で，この講座が日常生活とつながってい

表10　子どもの変化　　複数回答

1. 集団の中での成長と変化 あいさつ・片づけなどができるようになった 明るく活発になった・のびのびしてきた ことばの表現が豊富になった ――など	80 (43.2)
2. 友だちとの関係 友だちと遊ぶたのしさを覚えた 友だちのなかに入り，積極的になった ほかのところでも自分から進んで遊ぶ ――など	63 (34.1)
3. 日常生活と講座とのつながり 講座の日がたのしみ，待ち遠しい 講座でやったことを家でまねする 行く途中の乗り物に興味をもつ ――など	40 (21.6)
4. 母子分離 母親から短時間離れる自信がもてた 講座の回を重ねるうちすっかり離れられた ――など	4 (2.2)
5. その他 自己主張が強くなった 歯ぎしりをはじめた，どもりがひどくなる ――など	8 (4.3)
計	185 (100.0)

ることについての感想が21.6％あった。さらに，初めに母親と離れられなかった子どもが，9回の間に離れられるようになったことを述べている母親もあった（4名）。一方，「自己主張が強くなった」「疲れからか反発するようになった」など，子どもの変化をあまり肯定的に受けとめられない感想をもった母親も8名（4.3％）あった。

4）その他

その他の感想や要望では，「もっと続けてほしい」55名（29.4％）「今後もみんなと仲良くしていきたい」8名（4.2％）「またこのような機会を作ってほしい」13名（7.0％）など，この講座への積極的な気持の表われ(長く続けることはしないということについての説明をしているにもかかわらず）や，「もっと母親どうしの話し合いの時間がほしかった」18名（9.6％),「おべんとうを持って外へ行きたい」5名（2.7％）など，講座の方法についての要望，「子どもの声で，先生の話が聞きとりにくかった」12名（6.4％）などの注文があった。

Ⅳ　考　察

以上の結果から，次のような考察を行った。

1.　母親が問題視する2歳児の行動について

1）全体的傾向

(1)　子どもの発達

発達についての不安は，「言葉の遅れ」が最も多く，全体の約2割に達している。1歳児の頃は，個人差もあるからとそれほど気にしなかった親でも，2歳になると「しゃべれない」「単語だけである」と不安になるのは無理のないことであろう。2歳頃には，ことばの発達の早い子とおそい子とではかなりの開きがでてくるからである。しかし，我々が子どもを観察している範囲では，話すこと以外の言語理解の面では正常に発達していることがわかるケースがほとんどである。むしろ，子どもが言語で要求を表わさなくても母親が理解して要求を満たしている，といったように，母子のかかわり方が赤ちゃん時代から脱していないことが多く，母親からみた2歳児という時期のとらえ方の難しさを示しているといえよう。

(2)　子どもの生活習慣について

①食事について：食事について心配している者は過半数を越えている。内容をみると，「むら食い」が最も多く続いて「少食」「偏食」が挙げられている。その原因としては，2歳児は発達的に好き嫌いなどの気持を明確に表現することが可能になり，しかも，それが，そのときの場面に左右されやすい時期であることが考えられる。また，近年，現代の乳幼児の食事について，かまないで食べられる食品の増加や，子どもたちが充分身体を動かして遊んでいず，しかもスナック菓子や清涼飲料などの普及による食欲減退，さらに献立としてバランスのとれた食事が用意されていない家庭の増加，家族そろって食卓を囲む機会の少ない状況など，多くの問題が指摘されている。これらは，本講座に参加した2歳児も例外ではなく，これら一般の食事問題と，2歳児の行動特徴からくるものとが含まれていると考えられる。

②排泄について：排泄については，自立できていないことに対する不安が過半数を占めているが，排泄の自立を2歳頃を目標に考えている母親が多いこと，しかし現実にはまだおむつのとれない子どもが多いことを示しているといえよう。

(3)　子どもの遊びについて

友だちがいないことへの不安が57.2％もあることについては，本講座に参加した子どもの約7割が1人っ子で

あること，またここではくわしく検討できなかったが，環境的に，子どもが少ないこと，さらに，母親が，母子ともに仲良くなれるようなつきあいをあまりしていないことなどが考えられる。子どもの発達からみても，2歳児は，子どもだけではうまく遊べないが，友だちが必要であり，周囲の大人の工夫と努力が要求されるだろう。

(4) 子どもの気になるくせについて

「指しゃぶり」と「いつでも手離せないものがある」のほかは，特に目立つ項目はないが，この両者とも，育児書などでも見解がわかれており，また，それらの原因として母親の愛情不足が挙げられることが多いこともあって，これらのくせが母親たちの不安の対象になりやすいのではないかと考えられる。

(5) 子どもの態度で気になることについて

約9割の母親が，子どもの態度に何らかの不安を抱いていることは，講座に参加する動機にもなっていると考えられるが，その率の高さは注目に値すると思われる。内容については，「母親から離れない」「引っ込み思案」「泣きむし」「甘えすぎ」などは，母親との関係で，母親からみて自立できていないことに対する不安であり，「わがまま」「かんしゃくもち」「言うことをきかない」などは，やはり母親との関係で，母親の思い通りにならないことへの不安であると整理できよう。さらに，「らんぼう」「噛みつく」「他人のものをとる」「うまく遊べない」などは，他の子どもとの関係がうまくつくれていないことへの不安である。2歳になると，自分自身のつもり（予測）は出てくるが，それが母親の要求とあわないときに，そのギャップを自分で調整する力はなく，混乱してしまうことが，母親の目には「わがまま」と映り，母親に見守られるなかで安心して自分を発揮し，困難に出合うとすぐ母親のもとへ逃げていく特徴が，「甘え」と映る。また，ひとつのことに夢中になると他のことがまったくみえなくなったり，友だちに興味はあるのに，うまくかかわれない不器用さが，心配の種になる。母親の心配しているこれらの〝問題行動〟は，第一報でも述べてあるように，そのほとんどが，2歳児の発達的特徴であり，あたりまえの姿なのである。他の面に比較して，これらの子どもの態度に対する不安が極めて多いのは，こうした2歳児の特徴の理解と，それに応じた育児方法の理解の弱さに主な原因があると考えてよいのではないだろうか。

(6) 子どもの育て方の不安について

育て方については，「家庭内のしつけの統一」という項で，統一がとれないと述べている母親が3割を越しているが，子どもの父母と祖父母との間で不統一になるだけでなく，母親からみると父親の子どもへのかかわり方が不満である（甘すぎる，など）ことも大きく影響していると思われる。

2）わが子に対して不安の多い母親の特徴

特にわが子に対して不安の多い母親に，わが子の行動を否定的にみる見方と，のびのびした子がよいという理想のイメージとが同居していることは興味深い。2歳児は，前述のように，対人関係においても，ものの扱い方においても，自分でやってみようとする意欲，つもりとともに，行動の未熟さが目立つ時期である。このときは周囲の大人にとって扱いにくいだけでなく，子ども自身も，始終矛盾にぶっかっては混乱しているのであり，気分が安定して言うことをよくきき，ニコニコと一日よく遊ぶ子どもをイメージするとしたら，2歳児の現実の姿とのギャップは大きくなるばかりである。そのギャップに，母親がいらいらして子どもを叱り，子どもの混乱をさらに増してしまい，その結果としての子どもの姿をとらえて　わが子を否定的にみてしまうのではないだろうか。我々からみると，こうした傾向の母子の問題は，2歳児の行動特徴を母親が否定的にみてしまう見方そのものにあると思えるのである。

2. 講座を通しての母親の変化

1）全体的傾向について

圧倒的に多くの母親が，本講座に肯定的であったが，子育てについて強い不安を抱きながら，本講座の期間に解決の方向の見い出せない母親もあった。また，我々からみて，問題があると思われる母子でも，母親自身はそのことに気付かないというケースもある。これらは，継続的な心理治療や相談活動を必要としており，本講座で解決できるものではない

2）母親自身の変化について

育児をテーマに他の母親たちと話し合ったり，同年齢の他の子どもたちや，母子のかかわりを見たりすることで，母親自身の気持が変化し，ゆとりがでてくることが明らかになった。これは　1，で述べたように，母親の育児不安の多くが，2歳児の発達的特徴を問題視することからきていることを考えると，講義で2歳児の特徴をさまざまな側面から学び，それに関連してお互いの不安を話し合うなかで，子どもの行動は問題ではなく，2歳児の特徴であることが理解できていったこと，また，母親としてどのように接したらよいかについても，皆が同様の悩みを抱えていることを知り，自分達も皆と同じような母子であることが確認できたこと，などにより，育児不安が解消していったのであろう。そして，そのことにより，それまでの母親としての子どもへの接し方をふ

り返り，反省することも可能になったと考えられる。こうした母親の変化は，講座が，講義だけでなく少人数で質問もしやすいこと，またただの世間話でなく，育児に関するテーマをきめて母親どうしの話しあいを企画したこと，また，母と子が同じ室内にいるために，離れてはいるが，他の子ども，他の母子や保育者と子どものかかわり，さらにわが子を客観的にみる機会が多くあったこと，などによってより可能になったと考えられる。

3）母親からみた子どもの変化

この育児講座にくる子どもの多くは，まだ集団にはいった経験がなく，初めての集団生活によって子どもが急に成長したように感じる母親が多かった。母親の姿のみえるところで，最低のルールをきめ，友だちもいるという状態で家庭とはまた違ったあそびができること，保育者が非常に受容的であること，などが初めてで短期間経験する集団としては，2歳児には適しているように思われた。第一報の中でも触れたように，単純なルールなら守れるように成長する時期として2歳という時期がとらえられることが，母親の目を通しても確認できた。

4）他の機関を必要とする母親

この短期間の講座では，問題を抱えながら解決の見い出せない母親もあった。一方，われわれから見て，問題視せざるを得ない母子でも，母親自身は気付かないケースもある。ごく少数であるがこれらのケースに対しては，講座では限られた範囲内での助言にとどまり，問題解決まで講座で応ずることは不可能である。これらの母親と子どもは，他の機関で継続的な心理治療や相談活動が必要である。

5）母親自身の気持の解放

講座を始めるにあたって我々が意識的に目的と考えてはいないが，講座にきて，子どもの育児から解放され，講義を聞いたり，母親どうしで話し合うなど，わずかでも充実した時間がもてたことを喜ぶ声があったことは興味深い。赤ちゃんとは違ってきて扱いが難かしくなった子どもとともにいて，育児不安を増しながら毎日の生活に追われている家庭にいる母親にとって，きめられた曜日，時刻に9週間通う緊張と，育児，家事から離れた解放感は，貴重なものであろう。そのことだけでも，それまでの自分の子育てをふり返り，日常の子どもへのかかわり方を反省する機会になる要素があるように思われる。

V 結 び

以上，母親が問題視する2歳児の行動を，以前に分析した2歳児の行動特徴（紀要16，17集掲載）との関連で検討し，また，講座を通して母親がどう変化したかを考察した。そして，母親が育児上困難としている問題の多くは2歳年齢期の発達上の行動特徴であり，育児講座を通して母親が子どもへの接し方を学び，他の子たちを観察し，育児不安を解消していく過程をみることができた。このことは，われわれが講座を開始した第一の目的であり，出発点でもあったのであり，講座のもち方（手続き，場所，人数など ――Ⅱ方法参照）の成果と認めてよいと思う。

近年来，幼児教育の低年齢化傾向のなかで，母親のあせりや不安に乗じた育児産業は増加の一途をたどっている。しかし，子どもを預けて何かを教えてもらう「○○教室」では，母親どうしの競争意識は育っても，子育てへの自信は育たないし，専門家にまかせれば安心で母親では不安であるという方向へ母親を追いやるそとになろう。母親か子どもとのかかわりをふりかえる機会をもち，子育てを仲立ちとして母親たちで仲間づくりをしていくことが，子どもと母親の成長にとって欠くことのできない大切なことであると考える。この講座のもち方は，母親に講座終了後も継続して集い，話しあいたいという意欲を換起し，子どもたちにも遊びたい欲求を育て，母親たちが依存的にならずに自主的にグループを発展させるには適切な方法であり，実際にいくつかの自主的グループも育っている。これは，我々の講座の意図が十分生かされたことになるが，まだ各期全体からみれば限られた数である。講座終了後，半年～1年経過してから同窓会をかねたアフターケアを施行しているが，さらに自主的活動のグループが育つための条件を検討していくことが今後の課題である。

＜参考文献＞

1） 星美智子他：2歳児の行動特徴，日本総合愛育研究所紀要16集（昭和55年）
2） 星美智子他：2歳児の行動特徴に関する研究（2），日本総合愛育研究所紀要17集（昭和56年）